

山形浩生・守岡桜・森本正史訳、トマ・ピケティ著「21世紀の資本」みすず書房 2014年12月8日刊を読む

## 年率1パーセントの経済成長は大規模な社会変革をもたらす

1. 私が見るに、最も重要な点——具体的な成長率予測以上に重要(というのもすでに示した通り、長期の成長をひとつの数字に還元しようという試みはすべておおむね妄想じみているからだ)——は、1人当たり産出の成長率が年率1パーセントくらいというのが実はかなりの急成長であり、多くの人が思っているよりはるかに急速なのだという点だ。
2. (1)この問題について検討する正しい見方は、ここでも世代ごとに見ることだ。  
(2)30年の単位で見ると、年率1パーセントの成長率は累積成長率として35パーセント以上になる。  
(3)年率1.5パーセントの成長率は、累積成長率50パーセント超だ。  
(4)実際には、これはライフスタイルと雇用にとっては大規模な変化を意味する。  
(5)具体的に言うと、ヨーロッパ、北米、日本が過去30年で見せた1人当たり産出の成長率は、1～1.5パーセントであり、それでも人々の生活は大きく変化した。  
(6)1980年にはインターネットも携帯電話網もなく、多くの人は飛行機に乗ったこともなく、今日では普通に使われる先進医療技術の多くはまだ存在せず、大学進学者も少数派だった。  
(7)通信、運輸、保健医療、教育の分野ではすさまじい変化が起きている。  
(8)こうした変化はまた、雇用の構造にも強力な影響を与えた。1人当たり産出が30年で35～50パーセントも増えるということは、今日生産されているもののかなりの部分——4分の1から3分の1——は30年前には存在せず、したがって職業や仕事の4分の1から3分の1は当時は存在しなかったということだ。
3. (1)これが何を意味するかというと、今日の社会は過去の社会、たとえば18世紀のように成長がゼロ近くか0.1パーセントあるかないかの社会とは、かなりちがったものだということだ。  
(2)成長率が年に0.1～0.2パーセントの社会は、ある世代から次の世代へほとんどまるで変化がない状態で再生産される。  
(3)職業構造も、財産構造も同じだ。19世紀以来、最先進社会がやってきたような、年率1パーセントで成長する社会は、深い永続的な変化を伴う社会となる。これは社会格差の構造や富の分配力学にとって重要な意味を持つ。成長は新しい格差の形を作り出すこともある。  
(4)たとえば、経済活動の新しい部門では、きわめて手っ取り早く財産を築ける。  
(5)だが同時に、成長は過去から相続した富の格差を見えにくくすることにもなり、相続財産はあまり決定的なものではなくなる。  
(6)たしかに、1パーセントの成長率がもたらす変化は、3～4パーセントの成長が必要とする変化よりは急激なものではない。

(7)だから幻滅するリスクもかなり高い——これはもっと公正な社会秩序、特に啓蒙時代以来の希望を反映したものだ。

(8)経済成長は、この民主的で能力主義的な希望を満たすことはそもそもできない。こうした希望の実現には、そのための明確な制度を作らねばならず、市場の力や技術進歩だけに頼るわけにはいかないのだ。

4. (1)大陸ヨーロッパ、特にフランスは、「栄光の30年」なるもの、つまり1940年代末から1970年代末の30年間について、かなりのノスタルジーを抱いてきた。

(2)この30年は、経済成長が異様に高かった。1970年代末から、かくも低い成長率という呪いをかけたのがどんな悪霊なのやら、人々はいまだに理解しかねている。

(3)今日ですら、多くの人々は過去30年(まもなく35年か40年になろうとしているが)の「惨めな時代」がいずれは悪夢のように終わり、そして物事は以前のような状態に戻ると信じている。

5. 実は、歴史的に見ると戦後の30年間こそが例外的な時代だったのだ。

P101 ~ 102

[コメント]

欧米とは1年おくれ、2015年に日本の知識人が最も熱心に読むと予想されるのが、このピケティ先生の「21世紀の資本」だ。山形浩生氏の驚くほどわかりやすく、また、親しみやすい翻訳で、読む人を引きつけて止まない本に仕上がった。どのページを開いても、「うん、なるほど」と納得できる記述ばかりだ。「年率%」についての記述も読み終われば当たり前の話だが、極めて斬新だ。是非、御一読を。

— 2014年2月8日 林 明夫記 —